

## 学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	林牧子
2. 審査委員	主査：岡山大学教授 高橋敏之 副主査：兵庫教育大学教授 名須川知子 委員：岡山大学教授 尾上雅信 委員：鳴門教育大学教授 久我直人 委員：岡山大学准教授 吉利宗久
3. 論文題目	造形的イメージワークによる保育者の専門性としての自他の発見と受容
4. 審査結果の要旨	<p>先端課題実践開発専攻先端課題実践開発連合講座 林牧子 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成30年2月11日（日）14時30分～15時00分          場所：岡山大学教育学部東棟3階1308室</p> <p><b>1. 学位論文の構成と概要</b></p> <p>第1章 問題の所在と課題の明確化</p> <p>第1節 研究の背景及び問題の所在</p> <p>第2節 造形的イメージワークを構成する造形技法に関する説明及び先行研究の概観</p> <p>第3節 研究の内容及び構成</p> <p>第2章 造形的イメージワークの機能と自他への気づきに及ぼす影響</p> <p>第1節 造形的イメージワークが個人の感情体験に与える影響</p> <p>第2節 造形的イメージワークに伴う感情体験の過程</p> <p>第3節 造形的イメージワークを構成する各ワークの機能と関連性</p> <p>第3章 造形的イメージワークが子ども理解と保育者の専門性に対する意識化に及ぼす影響</p> <p>第1節 造形的イメージワークが保育者の自己理解に与える影響</p> <p>第2節 集団フィンガーペインティングが保育者の自己理解と保育の省察に与える影響</p> <p>第3節 フィンガーペインティングによる実感を通した保育者の子どもの感情理解と専門性の意識化</p> <p>第4節 造形的イメージワークが保育者志望学生に及ぼす保育者としての在り方に対する影響</p> <p>第4章 造形的イメージワークの可能性と今後の課題</p> <p>第1節 造形的イメージワークを通した自他及び子どもに対する気づき</p> <p>第2節 保育者の養成及びリカレント教育としての造形的イメージワークの機能及び有用性</p> <p>引用文献</p>

保育者は、その専門性において、幼児の内面及び幼児に対する自分の在り方の理解と人間性の自覚が不可欠とされている。しかし、これらの学びの具体化はされておらず、保育経験への依存や、理論的な学びを反復せざるを得ない現状がある。自己の振り返りの過程を客観化しなければ、自他の理解は促されないと考えられる。そこで、本論文では、子どもの感情状態を体験しつつ、客観的な自己理解を促進する方法として、造形的イメージワークを提唱し、その機能を検証すると共に、保育者の養成及びリカレント教育としての有用性を示すことを目的とする。

造形的イメージワークとは、個人コラージュ・集団コラージュ・個人フィンガーペインティング・集団フィンガーペインティング・集団カッティングの5種類のワークで構成されている一連の造形表現活動である。本ワークは、対象者自身が自己表現を行うことで生起する、肯定的な感情や葛藤等の体験を通して、自他の発見と子どもの感情や感覚への気づきを促すものである。本論文では、保育者養成校に在籍する学生及び現職保育者を対象として実施する。そして、体験後の振り返りを質的及び量的に分析した結果を基に、造形的イメージワークが、保育者の専門性としての自他に対する気づきを促す機能と意義について示す。

本論文は、先ず、第1章で、研究の背景及び問題の所在を明確化し、これまでの先行研究を概観した上で、研究の意義を示すと共に、研究の内容を説明する。次に、第2章で、造形的イメージワークが自他の理解に及ぼす影響とワークの機能について、量的分析及び質的分析を通して明らかにする。そして、第3章で、造形的イメージワークを、保育者志望学生及び現職の保育者に実施し、自他に対する気づきや、子ども理解の深化及び保育者の専門性における意識化の変容過程の分析と考察を行う。これらの結果を基に、本ワークが、自他及び子ども理解と保育者の専門性の深化を促し、保育者の養成及びリカレント教育に資する機能を有する可能性について示す。最後に、第4章で、本論の研究成果を総括して、今後の課題を提示する。本論文において、造形的イメージワークの実施に伴う研究は、第2章及び第3章に集約される。

第2章は、造形的イメージワークの機能を明らかにすることを目的としている。第1節では、造形的イメージワーク後に、全対象者に実施した自由記述を、「肯定的反応」「否定的反応」「混合反応」「その他」に分類し、造形的イメージワークを構成する5種類のワークの機能と特徴を探り、本ワークが対象者に与える心的影響について、量的分析に基づいて考察する。第2節では、造形的イメージワークの実施の過程における、対象者の感情状態の変容過程について、質的分析に基づき明らかにすることで、様々な感情状態が生起するワークの全体的な機能を探る。第3節では、対象者数を増やすと共に、自由記述の内容を、「自己への言及」「他者への関心」「否定的反応」「肯定的反応」「手順や方法への意識」に分類し、各ワークが有する機能と特徴を、量的分析に基づいて明らかにした。また、各ワークの関係性についても考察をした。

第3章は、造形的イメージワークが、保育者の養成及びリカレント教育に資する可能性と有用性を示すことを目的としている。第1節では、造形的イメージワークの実施の過程に伴う保育者の感情状態の変容過程を明らかにすることで、様々な感情状態が生起するワークの全体的な機能を探る。また、子ども理解に対する言及や、保育に結び付く気づきがみられるのか、質的分析に基づいて検討する。第2節では、学生時代に造形的イメージワークを体験している現職の保育者を対象として実施する。学生時代と現在で、集団フィンガーペインティングの体験によって想起される内容の差異を質的分析によって明らかにし、集団フィンガーペインティングが保育者の専門性の向上に寄与する影響について考察する。第3節では、フィンガーペインティングの体験によって、保育者が、子ども理解及び保育者としての在り方を認識する過程を、質的分析によって明らかにする。第4節では、保育者志望の学生を対象とし、造形的イメージワークが子ども理解と保育者としての在り方に対する意識化に及ぼす影響を考察し、本ワークが有する保育者養成教育の可能性を示した。

第4章では、第2章及び第3章における研究結果を基に、造形的イメージワークが保育者志望学生及び保育者の、自他理解と子ども理解の深化を促す一つの方法としての可能性について示唆すると共に、本ワークの限界と課題を明記して今後の展望として示した。

## 2. 審査経過

本論文の主要部分は、5編の査読付き学術論文として、全国学会誌である『保育学研究』（日本保育学会誌2017）、『乳幼児教育学研究』（日本乳幼児教育学会誌2017）、『美術教育学研究』（大学美術教育学会誌2015・2016・2017）に、共著論文の第一著者として掲載されている。これらの研究成果と内容についての審査を踏まえ、5名の審査委員が留意して討議した諸点は、以下の通りである。

### (1) 研究目的と論文構成の整合性について

本論文の目的は、保育者の専門性に不可欠な自他及び子ども理解を促進する方法として造形的イメージワークを提唱し機能を検証すると共に、保育者の養成及びリカレント教育としての有用性を示すことである。論文構成は目的に沿って、造形的イメージワークの機能を明確にした上で、保育者志望学生及び保育者の自他及び子ども理解の深化と、保育者の専門性に対する意識化の過程を検討する流れである。したがって、研究目的に整合する妥当な論文構成になっていると認められる。

### (2) 先行研究の概観と考察に使用された資料の扱いについて

本論文は、保育者の専門性の向上に寄与する研究と言える。先行研究の概観では、保育者の専門性の深化に対する具体的な方法が確立していないことを示した上で、その方法の一つとなり得る造形的イメージワークに関する主要な研究資料を網羅し、本論文の位置付けと研究意義を明示している。考察では、さらに先行研究を引用しつつ、得られた成果と保育及び教育における寄与について論考している。よって、研究資料の質・量及び扱い方ともに学位論文の水準にあると判断できる。

### (3) 分析と考察における客観性及び論理的な文章表現について

本論における分析と考察共に総じて、主観的恣意的な記述を排除し、科学的な解釈や論理的な文章表現への配慮が認められる。分析では、適宜、カイ二乗分析による量的分析及びMM-GTAやTEAなどの質的分析を行い、客観的な分析に努め、研究の再現性・妥当性・信頼性を高めている。また考察では、先行研究や関連領域の知見を引用しながら、筋道を立てて論考を進めている。論の運び方は明快であり、得られた調査と分析の結果から、納得がいく合理的な結論を導くことができている。

### (4) 教育実践学の学位論文としての独創性及び発展性について

保育者が子どもの感情を理解する能力の促進は、保育者の専門性の深化において不可欠であることは明確にされているものの、具体的な方法はほとんど確立されていない。本論文は、保育者が子どもの感情状態を追体験しつつ、子ども理解を深める機能を有する造形的イメージワークを開発し、感覚等に依拠した理解の傾向にあった子どもの感情を、実感を伴って理解する方法を示した。よって教育実践学の観点から独創性に富んでおり、今後の研究の発展が期待される内容と言える。

### (5) 学位に学校教育学を付記する根拠としての学校教育実践への貢献について

本論文は、保育者の専門性における自他及び子ども理解を深化させる機能を有する造形的イメージワークが、保育者の養成及びリカレント教育に資する可能性を示した。分析結果から子どもの感情に対する間主観的な理解の在り様が示されており、保育者志望学生及び保育者における子どもの感情に対する実感に基づいた理解を深化させる手法を構築したと言える。これらの点において、学校教育実践に貢献する成果と認められ、学校教育学の推進と方法の確立に寄与する論文と言える。

## 3. 審査結果

以上により本審査委員会は、林牧子の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。